

“シャーマン”ではなくなった河上隆一の言葉

# シュークリームのようなプロレスラーになります

長きにわたりGLEATのリングで極悪の限りを尽くしてきた河上“シャーマン”隆一が、2・11後楽園ホールにおけるブラスナックルJUNの誤爆を機に元の河上隆一へと戻った。このオフ中に再契約を結び、晴れてGLEAT所属のプロレスラーとなったが、選手や関係者、さらにはファンの間でも疑念は拭いきれない。そこで本人の言い分を聞いてみた。3週間前にシャーマンとして取材した時とは別人のような口調、そしてどこまでも穏やかな表情、澄んだ瞳…あとはこれを読んだ皆さんに判断していただきたい。

(聞き手・鈴木健.txt)

## 暗く土臭い闇の中にいたからこそGLEATに華やかさを加えたい

**河上** 健さん、お久しぶりです！大日本プロレスに所属していた時以来ですね。

——……いえ、実は河上さん、3週間前にあなたをインタビューしました。

**河上** えっ!?

——2・11後楽園ホール大会に向けての意気込みやフリーの労働組合として団体を改革するといった前向きな言葉に終始していました。文献として、GLEAT公式サイトにアップされているのが確かな証拠です。

**河上** ……すみません、記憶にないです。今、ここで話している河上隆一のハッキリとした記憶は、その後楽園ホールのマットで大の字に倒れているところからなので、それ以前の記憶がどうにも…何か、硬い物で頭を殴られたような鈍痛で目が覚めた感覚で、我に戻ったら坊主頭の人がチャンピオンベルトを持っていた。しばらくしてから、それがリングマンだと気づきました。

——その人が誰なのかというのはわかったんですね。

**河上** 過去の記憶として残っているのは、リングマンが髪を伸ばしていた時だから最初はわからなかったんです。顔をよく見て「あれ？これリングマンじゃん。なんで坊主にしてんの!？」ってなって。

——後楽園で痛みを感じる前の記憶はどこまで残っているんですか。



**河上** □にするたび申し訳ない思いでいっぱいなんです、鈴木裕之社長を爆破したところまでですね。そこから先が途切れていたり、あったとしても曖昧で時系列がグチャグチャになっていた、断片的でしかなかったりで…うっ、昔を思い出そうとするとツツツツて頭に痛みが走るの、申し訳ないのですがあまり過去のことは…。——わかりました。爆破というと、もう1年半以上も前のことですから、その間の日常生活…何を食べてどこにいつてというようなことの記憶もないんですね。

**河上** かすかにはあるんです。何か土の匂いとか、暗いところにいた記憶は残っています。ロウソク…何かが焦げる匂い…ううっ！

——あまりいい風景ではないですね。

**河上** あとは、風景とは違うんですけどなんだかすごく闘っていた感触が残っています。なんですかね…ある意味、世間と闘っていたのか。でも、間違ったことをやっている認識ではないんですよ。

——鈴木社長を爆破させたのも、悪いことという認識ではない？

**河上** それは今になって思うことですね。やった時はこれこそが正義だと思ってやったんだと思います。当時は僕なりに現状を打破しなければという強迫観念レベルのものにとらわれている状態で、そこで引退を控えたカズ・ハヤシさんが電流爆破マッチをやりたいとアピールしたのを見て、いっちょ噛みと言いますか、エゴ的なものが僕にもありました。それで試合のあと、言うなれば大仁田厚にそそのかされた部分があって。「俺らがここまでやっているのに、鈴木社長は傍観しているだけじゃないか。それでいいのか!？」って。

——選手ではないからそれで当たり前なのでは。

**河上** 今考えると、その通りだとわかるんですよ。ただ、その時は鈴木社長のことが代表兼レスラーであるかのように錯覚してしまって…それであの蛮行を働いてしまったんです。

——蛮行なんですか、あれは。

**河上** 200%蛮行です。なので今回、再契約するにあたって最初に謝罪しました。「その節は大変申し訳ございませんでした」と言いながら、頭をつきました。

——そこまで丁寧に。

**河上** もちろん。だって、刑事事件になってもおかしくないことをやってしまったわけですから。爆破の瞬間に生じたすごい熱が、私の体に刻み込まれている。ああ、社長はこの何倍もの熱い目に遭ったんだなと思うと、鉛のように頭が重くなり自然と下がっていましたね。体の本心と言いますか。

——気持ちの本心ではなく、体の本心。あの時は「社長を爆破したぐらいでクビにする会社がどこにあるんだよ！」という言い分でした。



**河上** だからこそよけいに、刑事告訴されずに済んだ幸運を噛み締めるんです。やってしまったことに対するペナルティーは与えるけれど、社会的信用が落ちるところまでは課さなかった。これは自分の一方的な解釈ですが、もしかするとそれまで私がGLEATでやってきたことが、社長の気持ちを引き留めたのではないですかね。

——自身を取り戻したことで、GLEATの所属に戻りたいと思ったのですか。

**河上** その気持ちもありましたし、実は社長の方からも歩み寄ってくれたと言いますか。こちらからまたGLEATでお世話になりたいとの旨を伝えたと、二つ返事で契約書を提示されたんです。それを見て、ああ…社長もこうなることを待っていたのかもしれないって思いました。まあ、僕がシャーマンとして…いや、シャーマンと□にすると頭痛が痛くなるのでここは“シャーマン”としましょう。

——複数形ですね。

**河上** シャーマンと化してGLEATに上がっている間、カズ・ハヤシさんの引退をピークに観客動員が落ちてきて、CIMA選手らが退団したというのを、実は河上隆一に戻ってからYouTubeにアップされている動画で見ましたよ。

GLEAT、今って全部過去の動画が無料で見られるんですね。いやあ、助かりました。  
——宣伝ありがとうございます。

**河上** まあ、見てしまうと頭痛が発症してしまうんですが、それでも再契約をする上で自分の記憶から抜けているところは確認しなければと思って見たんです。それで思ったのは、やはりちょっと、盛り上がりりに欠けているなど。それで社長は、現状を変える起爆剤として河上“シャーメン”隆一ではなく、河上隆一に期待をかけていただいたのではと受け取りました。あと、これも表には出していなかったんですけど、後楽園の試合後にリングマンから「GLEATをハッピーにしてほしい」と言われまして。自分の想像以上に悪いことをやってきたと思われるのに、そんな人間に対しポジティブなことを言ってくれたのを聞いて「陰極まりて陽となる」という言葉が浮かんだんです。知ってますか？月って太陽にもなれるんですよ。

——そうなんですか。

**河上** 逆もまた真なりで、太陽も月になれる。だから私も、太陽に戻れるんじゃないかってリングマンの言葉に希望を持ったんです。それで鈴木社長の無言の契約書提示も、きっと希望を表現したんだなって。無言で差し出すというムーブがまた、男の中の男ですよ。

——男の中の色男ではなく。では、リングマン選手とはあの後楽園の時点でわかり合えたんですね。

**河上** いや、彼もこの1年8ヵ月…苦しんで…きたと思うんですよ(感極まったのか、言葉に詰まる)。それは反GLE MONSTERSやシャーメンによる影響より、ほかの影響の方が大きかったと思うんです。だからこそ、彼のことを救いたい。GLEAT初期の頃のような、純真な笑顔でプロレスをやっていた頃のリンちゃんに戻ってほしい。もちろん彼は今、G-REX王者としてとてつもないものを背負う立場にあり、その重責が子どものような笑顔を消しているのかもしれない。でも、GLEATのキャッチフレーズにあった「スタイリッシュで疾走感のあるプロレス」をもう一度掲げるには、

エル・リングマンが一番体現できる男だと思うんです。私はそこに、もう一つの要素を加えます。

——それはなんですか。

**河上** 華やかさです。まあこれは自身の境遇から来ると言いますか…先ほど申した通り暗く土臭い闇の中にいたので、それを心機一転させたいというのがあってあります。

——華やかさですか。ご自身は記憶にないのかもしれませんが、かつての河上隆一はどちらかというは無骨さを個性とするタイプだったんです。華というのは、ちょっと意外というか。

**河上** その昔、バルクオーケストラというユニットでけっこう華やかにやっていたつもりなんですけど…今は、ないでしたっけ？

——ないです。バルクは華というよりテンションという感じでしたが。

**河上** あとは…やんずファミリーという僕の好きなユニットが…。

——それもないです。

**河上** そうでしたか。やはり時は流れているんですね。となると、また新しいユニットが生まれるかもしれないですが、自分がGLEATを変える前に自分自身が変わらなければならぬと思うんです。なので、まずは3・12新宿FACEでそれをなんらかの形にして提示します。

——その3・12新宿はリングマン選手、伊藤貴則選手とトリオを結成しブラスナックルJUN&佐藤☆恵一&ロック岩崎の元反GLE軍のお三方と対戦します。リングマン選手とは和解しましたが、それ以外の選手に関してははしこりが残っていると思われる。現に伊藤選手は、過去のことを忘れていないとXで釘を刺していました。

**河上** そこはキツパリと男らしく、イチから信頼という華を積み上げていくしかないと思っている次第です。自分のおこないによって覆していくしかない。

——おこないとは、具体的に？

**河上** 助けます！(爽やかな笑顔で)

——助ける…。

**河上** 試合ではしっかりと力を合わせて、少しでもパートナーのスタミナが消耗しないよう自分が頑張るし、あとはカットプレーでとにかく助けまくります。それが態度で示すというものじゃないですか。一般社会もそうですけど、信頼を失うのって一瞬だし、たった一人でやった、たった一つのおこないによってすべてがダメになってしまうんですよ。河上隆一が戻ったことで、今のGLEATでそれが生じてしまっている。だから社会と同様、他者の力になることで一つひとつ信頼を積み重ねていくしかないのだと思っています。見ていてください。



# 河上隆一、シャーマンに戻ったら即契約解除スペシャル

——リング上はともに闘うことで理解し合える部分もありますが、問題はリング外での人間関係の修復です。

**河上** 伊藤くんが菓子折りの一つでも持ってこいと言っていましたよね。3月12日の新宿で持っていきます。伊藤くんには楽しみにしていただいて…。

——菓子折りはやはり、お詫びといえぼのとらやの羊羹ですか。

**河上** うーん、伊藤くんは食いしん坊と思われるので、もっと高カロリーのものがないんじゃないでしょうか。確かにとらやの羊羹も喜ばれるし、お菓子のホームラン王のナボナとかもオススメでしょうけど、ここは定番のシュークリームにするつもりです。シュークリームって、すごいんですよ。だって、誰が食べても幸せになれるじゃないですか。

——真壁刀義さんも若手時代、厳しい練習の合間にスイーツを食べるとやさしい気持ちになれたのがスイーツ真壁のはじまりだと言っていました。その中でもシュークリームは鉄板です。

**河上** 僕は、シュークリームのようなプロレスラーになりたいんですよ。見る者を幸せにさせて、コーヒーにも紅茶にもお茶にも合う万能タイプ。そういうプロレスラーが今のGLEATには求められているのではないのでしょうか。

——シュークリームのようなレスラーというのは、世界を見渡してもいないでしょうね。

**河上** 問題は伊藤くんがシュークリーム好きかどうかなんですけど、まあ体型的には好きそうな体をしているから間違いないでしょう。

——それと、自分を殴ったブラスナックルJUN選手に関してはどうするつもりですか。

**河上** 僕のことをザコ呼ばわりしたので…またサラサラヘアーの頓所隼に戻してあげようかと。

——そこは怒りでやり返さないんですね。

**河上** やはり、こうしてシュークリームのようなプロレスラーになると明言したわけですから、ブラスナックルJUNにもシュークリームを食べて幸せになってほしい。

——平和的解決を望んでいるんですね。

**河上** もともと河上隆一という人間は、普段はボーッと生きているんですけど、リングに上がってスイッチが入っちゃうとガーッといっちゃうタイプなんです。

——ボーからガーへ。

**河上** だから、もしかすると激辛シュークリームになってしまうかもしれないですけど、なんとか激甘のダブルホイップカスタードシュークリームでいけたらと思っています。やっぱり、リンダマンから「GLEATをハッピーにしてくれ」という命を受けたからには、それが私の使命だと思うんです。いがみ合うことでは何も生まれないという真実を、僕は図らずもシャーマンになったことで証明してしまった。もう、あんな不毛なことはしたくないし、GLEATをそんな場にもしたくはない。これからは「GLEATしようぜ！」もいいですけど「GLEATでハッピー！」も掲げたいんです。

——「プロレスでハッピー」のアイスリボンみたいです。

**河上** アイスリボン！そのワードが僕の記憶をまた呼び覚ましてくれました。実はその昔、アイスリボンの道場開きで提供試合に出ているんですよ。

——へえー、知らなかったです。

**河上** だから密かに思い入れがありました。おそらく、思いはアイスリボンと同じだと思うんですよ。それを踏まえると、いっそのこと「プロレスでハッピー、GLEAT！」と言った方がいいのかもしれないですね。

——昔からハッピーを植えつけられていたと。

**河上** そうなりますね。藤本つかささん、星ハム子さんと同期ですし。アイスリボンイズムを継承しているとは言わないですけど、ハッピーという言葉によってアイスリボンの皆さんは同じベクトルを向いているわけじゃないですか。GLEATも旗揚げ当初はそうだったはずですよ。でも今は、それぞれがそれぞれのベクトルを向けているように映っていて。そんなバラバラなベクトルを僕のハッピーシュークリームで同じ方向に向けさせたいんですよ。選手が一丸となって、一つの方向を向いているプロレス団体って強いじゃないですか。いいやつも悪いやつもいるけど、そこはまた別としてプロレスラーだけでなくお客さんも笑顔で家に帰れるようにしたいんです。

——いや、素晴らしいと思います。

**河上** 失われた時間は取り戻せないですからね。でも、自分がやってきたことがなんだったのかは、ここから答えを出せるんです。信頼を一つずつ積み重ねていきさえすればね。

——あのう、先ほどYouTubeで記憶を失っていた頃の映像を見たと言われたじゃないですか。河上“シャーマン”隆一の所業を見てしまっているんですよ。

**河上** ……実は見てしまいました。あれ、自分がやっていたことなんですよ（深く溜息をつく）。2月の後楽園のいでたちなんて…某・大日本プロレスの“黒天使”沼澤邪鬼のようだったじゃないですか。

——言われてみれば！現地では気づきませんでした。

**河上** 邪鬼だけに、さまざまなドス黒い邪気がシャーマンに入り込んでいたんでしょ

うね。  
——あの姿が自分ですよ。

**河上** ……。

——すいません、責めているわけではないんです。

**河上** いえ、事実ですから。でもあれは、自分であって自分じゃない。世に跋扈(ばっこ)する邪念、邪気の塊であるシャーマンが、自分の体に宿っていたのが映像を見てわかりました。あれを1年8ヵ月もの間やっていたのは、本当に申し訳なく思います。たぶん、私が映像で見たもの以外でも、非道の限りを尽くしてきたんでしょうね。

——ハッキリ言って非道の限りを尽くしてきました。観客のペットボトルのお茶を奪って、その人の頭からぶっかけたりとか。

**河上** そんなことを…。

——偏見かもしれませんが、あの分なら赤信号を渡るとか、脱いだ靴を並べないとか、部屋の電気を消さないで寝たりとか、日々の中でもやっていたんでしょうね。

**河上** 所属の選手たちが「何を今さら」となるのも当然ですよ。だとしたら、選手たちが見ていないところでちゃんと赤信号では停まり、靴は並べて、寝る時も電気を消して節約するようにします。普段の姿勢が出ますからね。そういうことをしっかりやった上で男一匹・河上隆一、一番下から「今日もよろしくお願いします!」と頭を下げて、リング設営から始めてキャンバスを雑巾で拭き、ターンバックルを磨きます。

——小さなことからコツコツと。

**河上** 誰よりも早く会場入りして、誰よりも最後に帰ります。それぐらいのことをやらないとこの1年8ヵ月間は取り戻せないし、むしろそれが最短なのかもしれない。「遠回りこそが一番の近道」って言うじゃないですか。

——そこまでやっても、GLEATのファンの間では「河上隆一に戻ったと油断させて、どこかでまたシャーマンに戻るのでは」という見方も根強いです。私は疑っていませんが、あくまでもファンの中には…。

**河上** わかりました。そこまで言うならば、3月12日以後、再びGLEATに反旗を翻すようなことをやったら即契約解除でいいです。

——河上隆一、シャーマンに戻ったら即契約解除スペシャル。

**河上** 口だけで言っても証明にならないので、再契約書の条項に文章としてその旨を付け加えてください。正式な文書って、難しく書くことで別の解釈をされる場合があるじゃないですか。だから「裏切ったらクビね」ぐらい簡潔な文言でいいです。

——公文書なのに、そんなカジュアルな文言でいいんですか。

**河上** いいですよ。鈴木社長に申し出ます。なんなら、その加筆した部分をSNSで公開することでファンの皆様にも信用していただけるのであれば、僕はかまわないで



す。私は…いや、俺はね、そこまでしてでも盤石の信頼を築きたいっすよ。

——……(けっこうジーンと来ている)。

**河上** その昔、僕は山本小鉄さんの指導を受けたことがあったんです。

——大日本の道場へ出張し、教えていただいたんですよ。

**河上** そこで教わったのが「脚から鍛えなさい」でした。足腰ってプロレスに限らず運動の基本じゃないですか。にもかかわらず、それより先に技を出したくなったりカッコいい体を作りたくなったりする。でも小鉄さんは「プロレスラーはな、常人よりも重い体重を背負いながら素早く動かなくちゃならないんだ。だから、落ちているゴミも誰よりも素早く拾えるようになれ」と。

——ゴミの拾い方まで教わったんですか。

**河上** ダンベルを持って、延々とスクワットをやらされました。やりながら「素早くゴミを拾うためにこんな辛い目に遭わされているのかよ!」ってその時は思いましたけど、今ならわかるんです。足腰を鍛えることがすべてに通じ、そして一番の近道なんだと。信頼を回復させるのも、それと同じですよ。ああ…今、昔の記憶を蘇らせたことでまたイチからプロレスに向き合いたい!って心から思うようになりました。山本小鉄さんに感謝です。

——グレート小鹿さんには、そういう今も実になることを教わったんですか。

**河上** 小鹿さんには怒られた記憶しかありませんね。北海道のスナックで、小鹿さんが歌ったあとに若い僕らも歌い出したんです。でも、しばらくすると何も言わずに黙って帰っちゃったんですよ。

——どういうことなんでしょう。

**河上** 本当に無言で跡形もなく消えたんです。おそらく、若い者同士で盛り上がっているのが気に入らなかったんでしょうね。あとは、巡業バスで漁港に立ち寄った時に、会ったこともない漁師さんに「魚を分けてくんないかにい」って言うんですよ。それで、大量のニシンをもらったんです。それをその日の泊まった旅館で、みんなして食べるという。ほかにおかずがない、オンリー・ニシンですよ。

——それはシンドいんですね。

**河上** だから、小鹿さんから学んだのは「遅く生きる」になりますね。プロレスというより、人生における遅い生き方。

# 鈴木社長という宝船に乗って プロレス界のド真ん中を進みます

——そうですか。これまでの話をまとめるとアイスリボンや小鉄さん、小鹿さんといったこれまであまりリング上で出していなかった要素をこれからは出していくということですね。

**河上** また自分を見つめ直した上で、プロレスに正面から向き合い、ド真ん中のプロレスを目指すということです。皆さん、気づいていなかったと思いますけど後楽園のラスト、リングのド真ん中に立っていたのは河上隆一でした。そして、そんな私を客席の皆さんはとてども応援してくださいました。つまり、河上隆一がリングのド真ん中に立つ姿を求めているんだと確信しました。あるべき場所に還ってこられたという嬉しさがありましたね。だからこそもう一度、プロレスと向き合いたい。

——シャーマン以前の、河上“ファイヤー”隆一の記憶はあるんですか。

**河上** うーん、あまりないですねえ。期間が短かった気がするし「ファイヤーじゃダメだ、うわーっ!」となって地下に潜った気がするんで。まあ、それでクビになったことで精神的に追い込まれていたんだと思います。今、自分の体を見るとあちこちに憶えのない傷があるんで…精神的に弱っている状態だから、忌々しいシャーマンはうまく入り込んだんでしょうね。でも、そこから抜けられたのって、ある意味ブラスナックルJUNのおかげなんですよ。

——まあ、そうですね。

**河上** そこは感謝すべきところでもあるから、彼のことをハッピーに導きたいという



のもあります。やっぱりね、ああいうモノで人を殴るのってよくないですよ。3・12新宿では、わかりやすく口頭で注意します。

——そこは闘いを通じてわからせるのではなく。

**河上** 闘いを通じた上で、さらにです。ちゃんと言葉で伝えて、そして最後はハグする。シュークリームのようにやさしく包み込みます。彼にも、もう一度プロレスに向き合ってほしい。頓所隼っていう男は、プロレスラーになりたいという純粋な思いが高じて、半年間の月謝を払ってまでしてプロレスラーになった男なんです。

——プロレス総合学院1期生ですね。

**河上** それが今では北斗の拳のザコキャラのような身なりになってしまっているじゃないですか。大金をはたいて成り果てたのがザコキャラなんて、そんな人生は哀しくないですか？

——どうでしょう、それはブラスナックル選手がどう受け取るかですが。

**河上** 北斗の拳のザコキャラって、すぐ死んじゃうんですよ。秘孔を突かれて数秒で笑える断末魔の叫びを放って死んでしまって、長生きした実例がない。だから、そこからすくいあげてやりたいんです。

——本人は週刊プロレス誌の2・11後楽園レポートで「試合にも出ていない俺が一番大きく載ったぞ!」とご満悦そうでしたが。

**河上** 彼はそれぐらいで満足するような人間ではないはずですよ。僕の目には、それで喜んでる姿が虚構にしか映りません。

——自分をブラスナックルで思いっきりブン殴った相手に対し、そこまで慈悲深くなれるとは…ある意味、達観されていますね、今の河上選手は。

**河上** ありがとうございます。現代社会の抱える問題として、リアルに顔を合わせることなくネット上でのコミュニケーションばかりに走る結果、目の前では言えないような攻撃性の強い言葉を当たり前のように発信するようになってきているじゃないですか。だからこそ私は、直接的に顔を合わせて言論を交わしたいんですよ。それも四角いリング…テーブルよりも円卓の方が気持ちも安らぐ。円卓に座ってシュークリームを食べるようなコミュニケーションをすれば、世の中はもっと平和になると思うんです。

——昭和の食卓のような。

**河上** そう!あの一家団らん感が、GLEATの1年目はあったんですよ。CIMA選手が強いお母ちゃん、お父ちゃんが鈴木社長。それを思うと今は一家離散状態なんですよ。そういう現状を建て直すのは、兄弟の中でも幸せオーラを持つ僕しかない。

——幸せオーラを持っていると自負されると。

**河上** ええ。実際、憑きものが取れたかのように今、幸せを感じています。日々の生活も充実して、トレーニングをしてもすこぶる調子がいい。だから3・12新宿は、自分でもちょっと怖いぐらいの化け物になっているんじゃないかな。いい意味での化け物にね。

——GLEATで闘っていく中で、今はやはりBLACK GENERATION INTERNATIONALの勢いがあります。

**河上** 彼らが今一番スタイリッシュで疾走感のあるプロレスというのをやっているんじゃないですかね。だからカッコいいとは思いますが。ただ、僕に言わせればB.G.I.に限らずGLEATの所属選手は、みんなのポテンシャルがすごいんですよ。先ほどリングマンの名をあげたようにね。でもそれをまだ出せていない。可能性があるのに、十二分には発揮できていない。それはおそらく、鈴木社長も思っているんじゃないですかね。

——GLEATの選手たちをよく評価しているのですね。3週間前のインタビューでは、B.G.I.に関してはリーダーの石田選手一人で持っているユニットだから、ほかのメンバーは蟻のようなものだと言っていました。

**河上** 憶えていません。僕なんかは、ああいったスタイリッシュな感じにはなれないですよ。だからその部分はあのユニットに任せて、自分は華による疾走感を出していく。違う部分でGLEATを底上げしたいなと。スタイリッシュでカッコよくなくとも目立つことはできるのが、プロレスの幅広さと深さじゃないですか。平和的解決って言いましたけど、平和の先にはお互いが正面から向き合った上でベルトを争う健全な世界が待っています。河上隆一もG-REX、G-INFINITY、そしてG-RUSHのベルトを狙います。

——G-RUSHまで狙うというのは、シャーマン様の時にも言っていました。

**河上** それはたまたま同じだったんでしょうね。その時に自分が何を口走ったのかは記憶にないですが、今の私としてはあのルールでも対応できる何かがある自分にもあると思っていて。どうしても軽量級のタイトルというイメージですが、可能性としては他の2つのタイトルよりもあると思うんです。

——まさに同じことを言っていましたよ。

**河上** そうなんですか!?そこで考えがリンクすることで、シャーマンが戻ってこないようにしないとね。気をつけなきゃ…。

——気をつけるといっても、シャーマン化したのは自身の意思とはまったく関係ないところで、気づいたらそうなっていたようなので防ぎようがないんじゃないですかね。

**河上** いやいや、その時は鈴木社長を爆破したことでクビになったり、精神的なストレスを抱えたりしていたからそこをつけ込まれたんだと思います。でも今は、実に精



神状態がいいですし、ましてや誰かに損害をもたらそうなどとはまったく思っていないですから、シャーマンも入り込む余地がないでしょう。逆に、クビになった人たちを助ける活動もしていきたい。

——クビになった人たちとは、GLEATをやめた人ということですか。

**河上** それはもちろんのことで、加えてプロレス界全体で何かしらの問題を起こしてクビを切られた皆さんの救済活動ですね。それができるのは、自ら経験している僕なんじゃないかと。現実的には難しいケースもあるでしょうけど、要はネガティブな状況にある人たちを救いたいんですよ。そこにある暗闇を、僕という太陽の光で消したい。

——なぜそこまでして他者のために？

**河上** 僕が太陽になれば、GLEATがプロレス界全体を照らす太陽になるからです。僕の手応えでは、2年目ぐらいまでのGLEATはそれができていた。でもそれがだんだんできなくなって、今は本来GLEATがやろうとしていたことをほかの団体がやっている。黒潮TOKYOジャパン選手のアップタウンがやっている、おもしろビックリ玉手箱のようなことって、本当はGLEATがやらなきゃいけないことだと思うんです。河上隆一の効果…いや、光果によってみんなが輝き出し、そして団体全体が輝くことで太陽になり得る。

——ついこの間まで闇の中の権化だった方が、太陽になるとは世の中何がどうなる

かわかったものではありません。

**河上** 一ついいことを教えましょうか。

——お願いします。

**河上** 人間はね、変わるんですよ。あそこまでシャーマンによって支配されていた人間が今、太陽になろうとしている。それは僕だけのことじゃない。一人ひとり、みんなが目指せばやれることなんです。だからこのことも、僕は口頭で選手たちに伝えます。Xにポストしただけで真意が伝わるとは思っていない。SNSは確かに便利だし伝わる速さもあるけど、これからの僕は試合と口頭で…それも口頭重視で物事を進めていきます。本来、闘いというのはまず言葉でコミュニケーションをとって、それでもわかり合えなかったり答えを導くことができなかつたりした時の手段としてあったものはずです。GLEATのリングも、直接的な対話でカタがつかなかった場合に闘う場と位置づけていきます。その方が平和じゃないですか。本来ならば、人は争うものではないんですよ。

——わかりました。今回のインタビューでは、やはりシュークリームのようなプロレスラーという言葉が一番刺さりました。グッズとして販売すればいいんじゃないですか。

**河上** それもいいですね。お土産として買ってもらい、家に着いてからも幸せになれる。僕はね、コーギーコーナーが大好きなんですよ。

——大日本プロレスの道場がある鴨居駅の道場とは反対側の口を出たところにありましたよね、コーギーコーナー。

**河上** ありましたね！僕もよくいってましたよ。あの他の追随を許さぬ圧倒的なコストパフォーマンスは企業努力の賜物じゃないですか。GLEATも、企業努力はできるはずなんですよ。

——コーギーコーナーを見習うプロレス団体。

**河上** 今はタイパ、コスパの時代でしょう。顧客は楽しいと思えないものに時間もお金も使わないですから。リングがなくとも、マットプロレスであっても人気が出る時代ですよ。そういう価値観の変化が激しい時代においてコーギーコーナーのシュークリームを見習い、圧倒的なパフォーマンスをGLEATは示していく。この5周年を迎えるタイミングで…5って、いい数字じゃないですか。陰陽五行という言葉もあるし。

——よくご存じで。

**河上** 5年目も挑戦を諦めない鈴木社長という宝船に乗って、みんなが同じ方角を見て乗れるか。

——そこは屋形船ではなく宝船なんですな。

**河上** 宝船でプロレス界のド真ん中を進みます。

